



## 池澤稔先生をお送りする

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮本, 勝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/10633">https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/10633</a>

# 池澤 稔先生をお送りする

宮 本 勝

池澤先生にはじめてお会いできたのは、入院中の病室でした。切羽詰まっていたこととはいえ、たいへん無礼なことをしたものです。

平成四年、本学に大学院が設置され、旭川校も平成五年から発足することになり、平成四年度はその準備におおわらわの年でした。当時、国語科の教官は書道を含めて五人で、大学院設置基準には国語科教育学教授など二人を補充する必要があったので、その確保に札幌、東京、さらには広島と奔走していました。折から全国の教育系学部・大学に修士課程を設置し始めた時期で特に国語科教育学の教授を確保するのはたいへん困難な状況にありました。旭川校の国語教育も、文部省への書類提出期限を数日後に控えて、まったく行き詰まっていました。そんな折り、伝手を頼って文部省に近い方を訪ねて上京して、その方から池澤先生をご紹介頂き、一筋の光明を見いだした思いで帰路についたことを鮮明に記憶しています。

ところが札幌の当時の勤務先に電話したところ、池澤先生は入院中だとのこと、見いだした光明が消えかかる思いでしたが、

念のためいろいろお聞きしたところ、軽く体調をくずされての入院で、長期にわたるものではないということだったので、無礼を顧みず病室に押しかけたという次第です。書類提出は翌日に迫っていました。午前九時に訪ねてすぐに返事してほしい、しかもこれは確実な人事ではなく、設置審の審査が通つたらという仮定の上でのことで、なんとも急で厚かましいお願いで、にべもなく追い返されて当然のところを、先生は二時間だけ待ってくれとおっしゃって、こころよく耳を貸してくれました。消えかかった明かりがまた灯った思いでありがたいことでした。そして二時間後、ご承諾の返事を頂いて、なんとか書類提出に漕ぎつけたのでした。

思えばあのとき、池澤先生に出逢っていなかったなら、出逢っていないでもご承諾頂けなかったなら、旭川校の国語教育専修は、設置が数年は遅れただろうと思います。先生のお陰で国語教育専修が発足できたといっても過言ではないでしょう。

そんなドラマチックな始まりから十年経ちました。大学院は教科教育学の分野が柱ですので、国語教育では、池澤先生が大

黒柱となって屋台骨を支えて頂きました。授業やゼミを通しての指導は勿論のこと、大学院生を中心にした旭川校国語国文学会の月例研究会も七十数回を数え、その間ほとんど欠席することなく院生の研究に対して指導や助言・批評をしてくださいました。

先生は、大学で教壇に立たれる以前は、高等学校国語教育と道教委の教育行政に長い間携わっておられました。本号巻頭の略歴を見るとおりです。そこから大学教育に転身されたのですから、同じ国語教育とはいえ、いろいろとご苦労が多かったと推察します。そんな苦労は一言も漏らしたことはありませんが、先生の研究室の書棚を覗きますと、哲学関係、特に認知心理学や現象学、記号論などに関する書物がたくさん並んでいて、新しく始めた関心の在りどころとご勉強の苦労を見とることができます。今年度の国語国文学会研究発表大会では、「分かるとはどういうことか」について、認知心理学的手法を用いて解明する過程を講演していただきました。講演要旨は「旭川国文」の次号に掲載予定ですが、大学院などでの講義を基にしたものだと思えます。

先生の授業のうまさ、授業で時々行う読み聞かせのうまさ、語りの間の取り方の絶妙さなどは、学生の間でよく話題になります。先生について語るとき、加うるに学生指導の懇切丁寧なところを漏らすわけにはいきません。ゼミ指導や学士論文指導ばかりでなく、進路・就職指導もたいへん親切に相談のり、

教授の模擬面接なども熱心に行いました。今年の教授は国語教育専攻では、一次試験に合格した八人の学生のうち、二次に合格して登録になったのは六人で、近年では、まあいい成績といえますが、なんと池澤先生の模擬面接を受けた六人が全員登録となり、受けなかった二人が残念な結果になりました。これはたまたまのこと、偶然の結果だと思えますが、先生の熱心な指導も与って力があつたものと思います。これは、国語教育専攻の学生ばかりでなく、先生は平成十二年・十三年度、就職対策委員長として、旭川校全体の就職、教授に尽力されました。特に教授は毎年、採用率が下がる状況のなかで気苦労が多かつたのではないかと察しますが、幸いに体調を崩されることもなく責任を全うされました。普段から健康にはずいぶんと気がつかつておられたので、できたことだと思います。

いろいろあつて十年。その十年が先生には充実した時間であつたかどうか。端から見るとは、そう不満の残るものではないと見えます。定年は世の定めで止むを得ないこと。しかしお仕事には定年はありません。先生は引き続き旭川に在住されるとのこと、来年度からも、今度は非常勤講師としてお世話になります。十年間ありがとうございました。そしてこれからも宜しく願います。